

に関する予報。植物と自然 19(11): 31-34。  
 栗田秀男・峰村 宏、1985a. 尾瀬沼におけるコカナダ  
 モの侵入と在来水生植物群落の変化。水草研  
 会報 (20): 11-15。  
 ———、1985b. 榛名湖におけるコカナダ  
 モと在来水生植物の分布について。水草研  
 会報 (20): 8-10。

百瀬忠征、1986. 東京におけるオオカナダモとコカナダ  
 モの分布。水草研会報 (26): 12-14。  
 三木 茂、1937. 山城水草誌。京都府。  
 下田路子、1987. 西条盆地(広島県)の溜池の水草。水  
 草研会報 (24): 5-7。  
 内島善兵衛、1959. 水温の熱収支気候学的研究。農技研  
 報告 A(7): 131-181。

## 岐阜県にも「チクゴスズメノヒエ」

角野康郎

キシウスズメノヒエは、平地の水路やため池の縁辺部に群生する雑草だが、その染色体数には $2n=40$ (4倍体)と $2n=60$ (6倍体)のものが知られている。4倍体と6倍体は外部形態で容易に区別できる。4倍体は、6倍体に比べて大形で、葉鞘部と葉身表面に細毛が密生するという特徴をもつのである。この4倍体は水路やため池に侵入すると、ほふく茎を伸ばしてまたたく間に水面に広がるため問題雑草として注目され、6倍体のキシウスズメノヒエと区別して「チクゴスズメノヒエ」と呼ばれるようになっていく。

今まで、「チクゴスズメノヒエ」は九州、四国、近畿地方でその分布拡大が知られていたが、去る10月下旬、岐阜県の本巣三川の輪中地帯を訪れた際、海津町及びその周辺の河川や水路に、この「チクゴスズメノヒエ」が生育していることに気付いた。特に大きな群落を成しているのは大江川である。ホテイアオイやオオカナダモとともに群生している。

これで中部地方まで「チクゴスズメノヒエ」の分布記録が広がったが、私は今までの観察から、この植物は西日本にはかなり広く、そして問題雑草として騒がれる以前から定着していたと推察している。キシウスズメノヒエの分布域である中部、関東地方も含めて、その分布実態を再検討する必要があるだろう。

OBrij Gopal "Water Hyacinth" (Elsevier, 1987, 471p)

ホテイアオイについて今までの知見の全てをまとめた本といってよいだろう。役に立つだけでなく、大変おもしろい。I. Biology, II. Environmental Impact,

III. Managementの3部からなるが、とくに分類・分布・形態・解剖・フェノロジー・繁殖生物学とつづく第1部は、とかく問題雑草として騒がれることの多いホテイアオイの生物学的側面を、防除とか利用の観点から離れてまとめており、ホテイアオイの種としての興味深さを認識させてくれる内容となっている。巻末には151頁にわたり2742篇のホテイアオイ関連の文献リストがある。

OR.M.M. Crawford ed. "Plant Life in Aquatic and Amphibious Habitats" (Blackwell, 1987, 452p.)

1985年に英国で開かれた表題のシンポジウムの論文集である。このシンポジウム直後に急死したりD.H.N. Spence教授に捧げられている。第1部は水生植物の生育環境、水中での光合成、成長や散布に関する11篇の論文からなる。第2部は両生植物の冠水に対する適応を代謝の面から論じたものを中心に17篇の論文を収録する。

OK. Biswas & C.C. Calder "Hand-book of Common Water and Marsh Plants of India & Burma. 2nd ed." (Bishen Singh Mahendra Pal Singh, India, 1984, 216p.)

表記の本は1936年に初版が出、1954年に第2版が出ている。私はこの1954年版をもっているが、最近、洋書のカatalogで新版が出たことを知り、早速購入してみた。しかし、出版社が変わったことと、1984年版という扉がただけで内容は全く同じでがっかりした(もっとも手荒に扱うとすぐにもバラバラになりそうな旧版に比し、装丁は丈夫になった)。それはさておき、情報の少ないインドやビルマの水草に関する本が入手し易くなったということで、ここに取りあげた。

(角野康郎)